

# 難聴幼児のコミュニケーションの発達

中津 愛子\*・友定 啓子

Development of Communication in Hearing-Impaired Young children

Aiko NAKATSU and Keiko TOMOSADA

キーワード：難聴幼児，コミュニケーション，家族援助

## I 問題と目的

乳幼児の難聴は、言語発達や社会性の発達に影響を及ぼす。難聴児は聴覚からの音声言語の獲得に困難を生じるため、言語発達は容易でない。難聴児の言語や社会性の発達のためには早期発見、早期療育が重要であるといわれている。

田中は、多数の難聴児の早期療育を実践している<sup>1)</sup>。その目標は、家族の情緒の安定であり、子どもの言語獲得には、親子の情緒の安定とそれに基づく円滑なコミュニケーションの実践と体験、および豊富な生活体験が必要であると述べている。

また、大沼は、早期療育の基本姿勢として、残存聴力の活用、補聴効果、早期母子コミュニケーション、多感覚の併用をとりあげている<sup>2)</sup>。健常児と同じように、家族とのコミュニケーションを通し聴覚音声言語活用の経験を重ねることが、後の言語発達に重要な影響を及ぼすという考え方である。

親子のコミュニケーションは、乳児期初期からの情動的な交流、共感的な体験が基盤となる。子どもが身近な人への愛着と信頼感を形成することにより、他者に気持ちを伝え、他者の意図を知ろうとするようになるのである。

難聴児の早期療育では、このように親子の共感的なコミュニケーション行動を確立するものが主流である。我々も、難聴幼児の早期療育において、日常生活における様々な体験から家族内コミュニケーションの確立を目的に実践を行っている。

本研究では1才6か月で難聴と診断され、療育を開始した1人の幼児のコミュニケーションの発達経過について報告し、難聴幼児の早期療育につき以下の点を検討し、考察を加えた。

1. 難聴児のコミュニケーションの初期発達の条件。
2. 難聴児はどのようにして言語の機能を獲得するのか。
3. 子どもが体験を通して、主体的にことばを獲得していくためには何が重要なのか。
4. 難聴児とその家族への援助のあり方。

## II 方法

1. 対象：R・T，男児。初診時年齢1才6か月。

\*山口大学大学院教育学研究科

家族歴：特記事項なし。家族構成：祖父，父，母，本児，妹。

生育歴：胎児期は特記事項なし。39週，吸引分娩で出生。生下時体重は3000g。

予定は5か月。座位は9か月。歩行開始は1才7か月。その後の運動発達は良好で，特に遅れを認めない。

相談歴：0才11か月の時，名前を呼んでも振り向かないことを理由に大阪市内の耳鼻科を受診した。しかし，精密検査はなく，難聴の診断はされなかった。その後も，両親は難聴の疑いとことばの遅れに対する不安を持ち続け，1才6か月児健康診査で発語がないことを相談した。Y病院小児科を紹介され，ABR（聴性脳幹反応聴力検査）を受けた。その結果，100dBで両側とも反応がなく，難聴が疑われた，直ちに同病院耳鼻科を紹介された。耳鼻科で行ったCOR（条件詮索反応聴力検査）では，90dBで音への反応が認められた。これらの結果より，両側高度感音性難聴と診断された。

初診時のコミュニケーション：「バイバイ」「おいで」は，音声言語による理解は困難で，他者がジェスチャーを使用すれば理解は可能であった。音声に反応するのではなく，視線，指さし，ジェスチャーから他者の意図を理解していた。有意語はなく，視線や指さし，ジェスチャーで自分の意図を表していた。

平均聴力レベル：右耳97.5dB。左耳91.3dB。

補聴器装用開始：1才7か月より，ベビークロス形補聴器を両耳に装用した。

療育開始：1才7か月より家族援助，基礎的コミュニケーションの確立を目指し，週1～2回の個別指導を開始した。

## 2. 手続き

聴能の発達と発声行動の変化，コミュニケーションの発達経過について調査した。

1) 調査期間 補聴器装用を開始した1才7か月から4才0か月まで

2) 分析の観点

田中・進藤らの行った聴性行動発達リスト<sup>1)</sup>を用いて，補聴器装用後の聴性行動を評価した。

発声行動の変化および音声発達について，廣田らのチェック項目<sup>2)</sup>を参考に評価した。

また，コミュニケーションの発達段階については大久保の健常児の発達<sup>3)</sup>を参考に評価した。

なお，コミュニケーションの発達経過は，母親の記録をもとに，語の意味内容の発達を中心に分析した。

## III 結果

### 1. 聴能の発達と発声行動の変化

表1に補聴器装用開始1か月以内にみられた聴性反応を示す。本児は，補聴器を装用し，1週間以内に，おもちゃの太鼓，笛の音，鐘の音，流し台にざるをぶつける音に気付いた。また，犬の鳴き声にじっと耳を傾ける行動も見られた。補聴器装用開始1か月以内には，人の声や動物の鳴き声，乗り物の音，電話の音，玄関チャイムの音，音楽の始まりといった日常の各種の音への反応が出現した。

次に表2に発声行動の変化について示す。発声量の変化は，補聴器装用開始1か月でみられた。また，音声の種類増加，音調の変化，他者の音声の模倣，要求時の発声は，補

聴器装用開始2か月でみられた。

このように、補聴器装用開始3か月という短い期間に大きな変化が表われた。本児は補聴器装用により、聴覚を活用し音声言語を獲得する基盤が成立したことがわかる。

表1. 補聴器装用開始1か月以内に反応のあった音

音の種類	音の種類
人の声	呼びかけ、人の声 子どもの泣き声
動物の声	犬の鳴き声 カラスの鳴き声 にわたりの鳴き声
生活音	電話のベル 玄関チャイム 鳩時計の音 ドアの閉鎖音 物の落下音 物の衝撃音 手叩き
楽器音	たいこを叩く音 タンバリンを叩く音 風鈴の音
スピーカーからの音	ラジオ、テープレコーダーの音 テレビの音楽の始まり 駅のスピーカ、アナウンス
乗り物の音	ヘリコプター飛行音 トラックが通る音 オートバイ、自動車の発車音 パトカーのサイレン 三輪車のベル

表2. 発声行動の変化

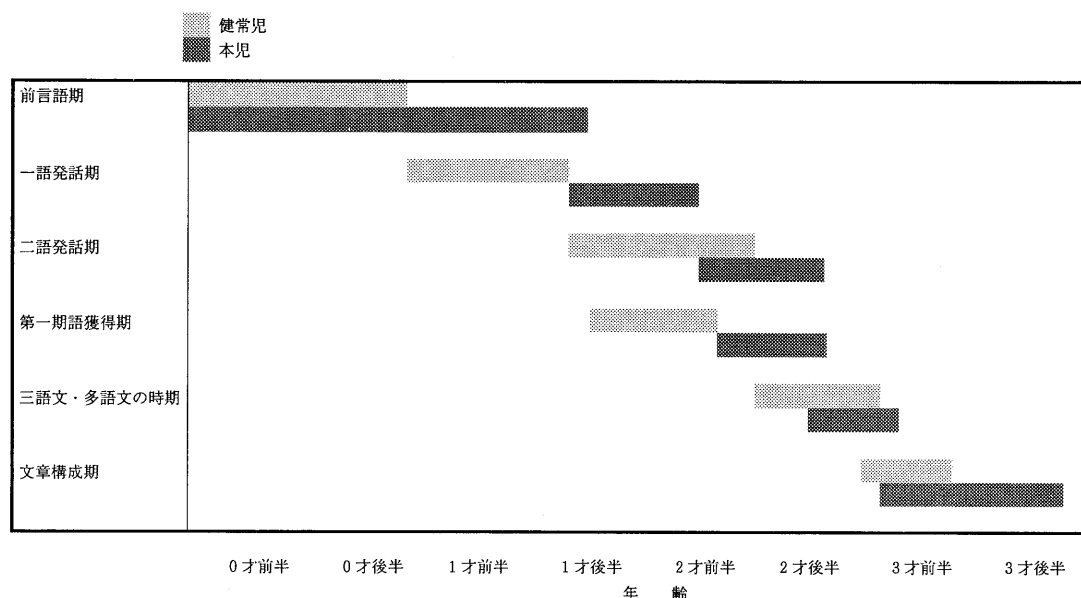
発声行動	出現した年齢
発声の量の変化	1才8か月
音声の種類が増加	1才9か月
音調の変化	1才9か月
要求時の発声	1才9か月
音声の模倣	1才9か月

## 2. コミュニケーションの発達段階

表3にコミュニケーションの発達段階を示した。初語は1才9か月、二語文の初出は2才4か月、三語文の初出は2才10か月であった。二語文の初出とほぼ同時期に、「これは(なに)?」と物の名称を問い、語の獲得をはかる発話が認められた。この時期を、本児の第一期語獲得期とした。また、三語文・多語文の時期は、2才10か月から3才2か月であった。さらに3才前半には複数の文章構成による発話が認められた。これを文章構成期とした。本児の文章構成期は3才2か月から3才11か月であった。

本児の言語発達は健常児の発達と比べると、時期的な遅れは認められるが、その発達の順序は同じであった。

表3. コミュニケーションの発達段階（健常児との比較）



### 3. コミュニケーションの発達過程

母親の記録をもとに、本児のコミュニケーションの発達経過について分析する。

#### 1) 前言語期 ～1才9か月（以下、～1：9と記す。）

初語出現の前段階には、視線、指さし、ジェスチャーなど、多様な手段を用いて意図を表す。本児は補聴器を装用し、音やことばの意味を理解しはじめたと同時に、音声を意図的に用いるようになった。

##### ①多様な手段の使用（注視、指さし、ジェスチャー）

〔鳩時計に気付く〕

- ・鳩時計から鳩が出てきて、「ぼっぼ ぼっぼ」と音がするのが気に入ったようで、なりおわってからもしばらく鳩の方を指さし、また出てくるのを待った。（1：7）
- ・鳩時計の音に気付き、指をさして、羽をぱたぱたするまねをした。（1：7）

鳩時計は時刻を告げる「ぼっぼ ぼっぼ」という音と、音が出るときにだけ鳩が出て来るということが特徴である。なりおわった後の指さしは、「鳩がぼっぼぼっぼと言ったあと、中に入ってしまった。」という鳩時計の動きを叙述するものと、「また出てくるかなあ」という期待をあらわすものである。鳩時計に興味を持った本児は、「ぼっぼ ぼっぼ」という音に気付き、音源を指し、羽をぱたぱたさせる動作で「鳩がぼっぼぼっぼと鳴いた」意味をあらわした。ことばの使用はまだ認められないが、指さし、注視、動作を使用し、多語文の意味を表している。補聴器を通して音の意味を理解していく過程と、注視、指さし、動作という多様な手段で他者に意図を伝えようとする様子がわかる。

〔音の意味を問う指さしや注目〕

- ・ドアの閉まる音に気付き、「あれ？」という表情で母の顔をのぞきこんだ。（1：7）

- ・「わんわんわん」という鳴き声の方を指さし、母の顔を見た。(1:8)

日常生活でドアの音や犬の鳴き声など、様々な音に気付き、音の意味を理解しはじめた時期である。音への気付きは「母の顔を見る」という行為で表している。母はその行為から子どもが「この音は何だろう」と疑問に思っていることがわかる。ここでの視線や指さしは、他者に対する質問の役割を持つ。

## ②発声行動の変容

発声の量が増加するとともに音声の種類が増加し、音声模倣が可能となる過程を表す。

[他者の音声を模倣する]

- ・父が風呂で、「ジャー」と言いながら水をすくっては捨てているのをまねて、「アー」と言いながら水をすてて遊んだ。(1:8)
- ・階段を上がる時、母が「よいしょ よいしょ」と言うと、「アーア アーア」と声を出す。(1:9)
- ・食事のとき、熱いものに母が「フウフウフウ」と息を吹くと、「パッパッパッ」とまねて息を出した。(1:9)

父や母が行動とともに発した語に対し、本児はその音声のリズムや抑揚を真似て表現している。父や母の発した語は行動と結びつくということを理解しはじめている。

[音声を模倣し、ジェスチャーを加えて表現する]

- ・新幹線が通りすぎたので、母が「ビューンと行ったね。速いね。」と言うと、「ウーン(ビューン)」と言い、通り過ぎるジェスチャーをした。(1:9)
- ・母が「オーイって呼んでみようか。」と言うと、まねをして、「アーアー(オーイ)」とジェスチャーをつけて言った。(1:9)
- ・父が「ブーブーが来たね。」と言うと、「ウーウー(ブーブー)」と言いながら、手でハンドルを動かすジェスチャーをした。(1:9)
- ・母が月をみて「まーるいね。」と、ジェスチャーをともなって言うと、「あーおい(まーるい)」とまねて言った。(1:10)

父や母の話(文)の中から一語を模倣し、さらにジェスチャーを加えて表現した。体験を共有した父母の話は、本児の気持ちを表すものでもあった。従って、単に音声を模倣したのではなく、自分自身の気持ちを表現することばとして、父母に伝えるものとなったのである。模倣した音声は抑揚やリズムの簡単な、構音の容易な語であった。これらは模倣しやすい韻律を持っているだけでなく、状況を表すキーワードとなる語である。本児は父母の文章の中からキーワードとなる語を抽出する能力をすでに養っていたと言える。

## ③意図を表す音声の出現

[自発的な音声]

- ・車の近付いてきた音に気付き、「アーア」と言いながら指をさした。「ほら、車が来たよ」と言っているように(1:9)

- ・犬の鳴き声が聞こえると、母の顔を見て、「アアー」（犬が鳴いているよ）と言った。（1：9）
- ・鳩時計の音がきこえると、羽をぱたぱたさせる動作をしながら、「アッアッアッ」と言った。（1：9）
- ・自分でおもちゃを投げては、「アアー」と言う。（1：9）

自発的な音声は他者への伝達機能を持ち、指さしや人の顔を見る行為とともに、意図を明確に表している。発する音声の種類は「ア」のみだが、抑揚やリズムに変化を持たせ、他者にその時々のおもちゃを伝えている。

（ ）内の記述は母が子どもの意図を言語化したものである。母は種々の場面で発した子どもの音声の意味を、状況を手がかりとすることによって理解している。

このように、前言語期では、視線、指さし、ジェスチャーなどの非言語的手段が、本児の意図を表す重要な手段となっている。さらに、母親を中心とする身近な人とのやりとりの中で、音やことばの意味を理解し、同時にことばが意図を伝達する手段であることに気付いていった。

幼児は言語獲得以前にその文法の基礎を表す意味構造を獲得し、その意味構造に導かれて具体的な表現を習得する。<sup>3)</sup>

本児は視線、指さし、ジェスチャー、音声を組み合わせて、意図を表すことを知った。これが、音声言語を獲得する力となった。

## 2) 一語発話期 1：9～2：3

この時期は語一語が他の伝達様式（文脈、ジェスチャー、発声、イントネーションのパターン）によって援助され、明確にされる。また、一語の意味は多様である。

### 〔要求〕

- ・母が「Rちゃん、ユーラン ユーランしようか。」と言うと、バスタオルを指さし、「アアー」（とって）と言った。（1：9）

母の話から、この遊びで使うバスタオルが必要だということを考え、「アアー」（とって）と要求している。

- ・ざりがににえさをあげたい時、えさをやるジェスチャーをしたあと、冷蔵庫の前に行き、「アッアッ（開けて）」と言い、扉をあけてほしい気持ちを表した。（1：10）

語は「アッアッ（開けて）」の一語であるが、ジェスチャーを含むと、「ざりがににえさをやりたいから、えさが入っている冷蔵庫のドアを開けて」という意味を表す。

- ・母を探すとき、「アアー（ママ）、アアー（ママ）」と言った。（1：11）

「アアー（ママ）、アアー（ママ）」と同じ語を繰り返し使用している。これは二語連鎖

の出現ともいえる。「アアー (ママ), アアー (ママ)」は「ママはどこ？」(疑問)「ママ来て」(要求)のどちらの意味をも表す。

[叙述機能]

・写真に写っている父を指さし、いつも見送る勝手口を指さし、「ブーブー」と言った。(1:11)

写真の父と勝手口を順に指さし、「ブーブー」と言った、それは、「パパは車に乗って出かけたよ」という意味を表す。

・父に抱きかかえられたり、高い所に登ったりすると、「アアーイ」(たかい)と言う。(1:11)

「高い」という語の意味を理解し、使用している。

・白鳥がえさを食べる様子を見て、「ウアウア」(ぱくぱく)と言った。(1:11)  
・あひるや白鳥にえさをやっているとき、鳴き声を聞き、指をさして、「アアア」と言い、口をぱくぱくさせるジェスチャーをした。(1:10)

指さし、動作、音声を使用し、他者に白鳥やあひるの行動を叙述している。

[聴理解から思考へ]

・母が「Rちゃん、ユーラン ユーランしようか。」と言うと、バスタオルを指さし、「アアー」(とって)と言った。(1:9)  
・母が「ブーブーが来たよ。」と言うと、車に「アイアー (バイバイ)」と言って手を振った。(1:9)

母の話(文章)を聞き、その意味を理解しただけでなく、次に必要なものを考えことばで表現した。文の意味を理解する力は、思考の活動を促すものとなっている。

[質問に対する応答]

・母が犬の絵を見せて「これなあに」ときくと、「アンアン」と言って舌をべーッと出し、犬のまねをした。(1:10)

質問の意図を理解し、考え、ことばで応答している。理解から思考、思考から伝達という経路を辿っている。

一語発話期の本児の語は、要求、叙述、思考、応答の機能を持っていた。また、本児が一語と他の手段を併用して表現した内容は、すでに多語文の意味内容を表していた。さらに、他者の音声言語を理解することは思考活動を高めるものになるということがわかった。鈴木は、幼児の発話や理解はその発せられる場面(特に指さし、視線、身振りといった

非言語的特徴)に大きく依存していると述べている<sup>3)</sup>。母は本児の一語発話とそれに伴う指さしやジェスチャーなどから、本児の意図を理解している。そのような子どもとおとなの相互のやりとりはコミュニケーションを支えるものとなる。

### 3) 二語発話期 2:4~2:10

子どもが語と語をつないで話すようになるには、一語発話期に語一語と他の手段を組み合わせて表現する力を養っていることが背景にある。また、その力は、文章を構成する能力の基盤となる。

語が増加しはじめると、二語連鎖がみられるようになる。子どもは語と語を組み合わせることにより、多様な意味を表現することができる。

#### [一語を重ねる]

・母が「ブーブーにのってSちゃんのおうちにいこうか。」という時、階段を指さし「アムアム」といったあと、「エーアン(Sちゃん), エーアン(Sちゃん)」と言った。(2:6)

エーアン(Sちゃん)という語を重ねて使用している。二語の連鎖は、エーアン(Sちゃん)のおうちに行こう、行きたいよ、という意味をあらわしている。

#### [二語文の模倣]

・おもちゃで遊んでいる時、母が「ブーブーに乗ってグワグワを見に行こうか。」と言うと、「グワグワ, ブーブー」と言って玄関に行き、急いでくつをはこうとした。(2:4)

・病院に行く前に、母が「先生のところに行ってぼっぼーの絵本見ようね。ながーい」と言う時、「ぼっぼー, ああーい(ながーい)」と言いながら、玄関に向かって歩き出した。(2:5)

・しゃぼんだま遊びをしているとき、母が「消えた, あーあ」と言う時、同じ場面で「イッア(消えた), アーア」と言った。(2:5)

・母が「ブーブーに乗ってSくんのおうちに行こうか。」と言う時「アウウン(Sくん), ブーブー」と行って玄関の方に歩き出した。(2:8)

母の言った文の中から、二語を抽出し、模倣するということから二語連鎖がはじまっている。模倣した音声は抑揚やリズムの簡単な、構音の容易な語である。さらにこれらの語は文のキーワードとなる語である。本児の二語連鎖は、初語獲得前の音声模倣の出現と同じ形をとっている。

#### [これは?(なに)という質問:第一期語獲得期]

・絵本を見ているとき、自分の興味があるものに対し「エア?エア?」(これは?これは?)と母にきき、母が答えると母の口元を一生懸命見て理解しようとする。(2:5)

・食事中に自分の食べ物を指して、「エア, アウ」(これは, アイス)「エア, ウア」(これは, りんご)とかよく言っている。(2:5)



これは何？という質問があらわれる時期は、語彙の増大がみとめられる。大久保はこの時期を第一期語獲得期と言い、語の増大がみとめられる時期と二語文の時期がほぼ同時期であると述べている<sup>4)</sup>。本児も語の増大の時期と二語文の時期は同時期であった。本児の一語発話期から二語発話期における語の増大の過程は健常児のものと同じ経過をたどっている。

[二語文の表現]

・母が「Wちゃん来れないんだって」と言うと、「アーアーン（Wちゃん）ナーイ」と悲しそうに言った。（2：6）

悲しそうに言ったところに、結果としてことばが自分の気持ちを表す手段になるということを獲得していることがわかる。

・ぶどうを見て、「ウオオ（ぶどう）アーウイ（まあるい）」と言う。（2：8）

「アーウイ（まあるい）」という語はすでに獲得し、使用していた。上記の使用はその語の概念を理解し、その意味を理解し応用したものである。

村田は二語文が可能になることにより、多くの意味関係を叙述することができるようになると述べている<sup>5)</sup>。しかし、二語文の叙述には発話に伴う行為や文脈が、意味を表す重要な手がかりとなることはいうまでもない。

本児は二語文を獲得したがいつも二語文で表現するわけではない。一語のみで表現するときや、語に他の手段を使用するときもあり、表現の形は様々であった。

4) 三語文・多語文の時期 2：10～3：2

語や文の数が増加するとともに、発話の内容も豊かになり、目の前の出来事だけではなく、過去の出来事や未来への願望を表すようになる。表象を言語で表現する活動がさかんになる時期である。

[母の質問に応答する]

・母が「Rちゃん パパは？」と聞くと「アア、ブブー、アッアー」（パパ ブブー バイバイ）と言い、悲しそうに「ナーイ」とジェスチャー付きで言った。（2：10）

・父が会社に行ってしまったあと、しばらくしてから、「Rちゃんパパは？」ときくと、「アア、ブブー、アッエ、アッエ」（パパ ブブー まって まって）と言ったあと、悲しそうな顔をして、ジェスチャーつきで、「ナーイ、ナーイ」と言った。（2：10）

母の質問の意図を理解し、父が出かけたとき（過去）のことを文で表している。また、その状況を思い出し、さびしいという気持ち（現在）を表現している。ことばは気持ちや感情を表す手段となり、過去と現在を結ぶものとなっている。

[母との会話]

・庭で死んでいるミミズを見つけて、母が「ニヨロニヨロが死んでいるね。」とジェスチャー

付きで言うと、ゴーゴーファイブのビデオに出てくるへびを思い出したらしく「ゴーイエロー、イターイ、グルグル」とジェスチャー付きでビデオの中の場面を説明した。(3:0)

自分の見たビデオの中からこの状況と良く似た場面を思い出し、その中でもっとも印象的な部分、特徴である部分をことばとジェスチャーで表現している。眼前の出来事から、過去の経験を思い浮かべ、その表象を言語化し、他者に伝達している。思考のための言語活動の例である。

・母が「今からSくんが車に乗って遊びに来るよ。」と言うと、「Sくん、ブーブー、アッア（まだかなあ）」とジェスチャー付きで言った。(3:0)

「Sくん ブーブー」は、Sくんが車に乗って遊びに来るという状況を思い浮かべて言ったものである。「アッア（まだかなあ）」は、楽しみにして待つという気持ちを表現したものである。本児の言語活動は、伝達された文章から、未来の出来事を予測し、さらに予測することで生まれる感情や気持ちを表す、という複雑な展開となっている。他者からのことばを手がかりにし、自分の思考を深めていく過程がわかるものである。

・母が「じいちゃんとサンパークに行ってゴーイエローを買ってもらおうの？」ときくと、「じいちゃん、ブーブー、アンパー（サンパーク）、ゴーイエロー、オアッア（下さい）」と何度もジェスチャー付きで言った。(3:0)

これからじいちゃんと車に乗って買い物に行き、ゴーイエローの人形を買ってもらいたいという気持ちを表している。母の話（文章）が自分の意図をことばで表す手本となっている。語の羅列であるが、その並びは順序を保ち、文を構成する要素を持っている。「オアッア（下さい）」は、本児の自発語であり、母の話（文章）にはないものである。本児はこの時期、買い物に行くという体験を重ね、母との遊びに買い物ごっこを行っていた。「オアッア（下さい）」ということばは、店の人とやりとりをするという場面を想定したものである。このやりとりは買い物という行為にもっとも重要なコミュニケーション活動である。何度もジェスチャー付きで言った、というところに買い物におけるやりとり場面の楽しさを味わおうとする気持ちがうかがえる。本児のコミュニケーション活動が、家族やよく知っている人から「お店」の人へと広がっていることがわかる。

#### [自発表現の増加]

・祖父と遊びたいとき、祖父が妹をだっこしていると、母に向かい、「アア（ママ）、ウアー（Yちゃん）アッオ（だっこ）、じいちゃん」と言って、祖父を自分の方に来るように呼ぶ。(3:0)

自分が祖父と遊びたいので、祖父に替わって母が妹をだっこすればよい、と考え、母にことばで命じた。そして、祖父を呼び、自分のところに来るようにしむけた。この活動には、自分の要望が叶うようにするにはどうすればよいかをことばで考え、自分の意図を他者にことばで伝えるという構造となっている。しかも、「じいちゃんと遊びたい」という

直接的な表現を用いず、「アア（ママ）、ウアー（Ｙちゃん）、アッオ（だっこ）」と言うことにより、自分の意図を母や祖父に伝え、他者を動かしている。本児における言語の機能は伝達、思考、問題解決の3つとなっている。

・夕方になって外が暗くなると、外を指さして、「ウアーイ、コアーイ（くらい、こわい）」と言ってから、お化けのジェスチャーをした。

うす暗くなると、お化けが出て来そうで、こわい、という気持ちをことばとジェスチャーで表現した。絵本のストーリーを日常生活に取り入れ、想像の世界を展開していることがわかる。本児にとって、ことばは現実の場面と想像の世界を行き交う橋渡しとなっている。

・ゴーゴーファイブのブルーとピンクの人形に「アッエ、ジュンバン、オーオ」（まって、じゅんばん、どうぞ）」と、言い、おもちゃの車に交替に乗せて遊んだ。（3：0）

友達と遊具に順に乗って遊ぶという体験をもとに、人形を用いてごっこ遊びを展開している。ことばは自分の想像を表現する手段となり、ごっこあそびの重要な手段となっている。

#### 5) 文章構成期 3：2～3：11

統語機能はまだ不十分であるが、文と文をつないで経験や考えを言語化し、他者に伝達するようになった時期である。言語の表象機能は、伝達、思考、問題解決と、その機能は高まっている。

・小郡駅に新幹線を見に行くととてもよるこび、「あっ 来た しんかんせん」「びゅーん はやいねえ かつこいいね。」と言う。待っているときは、「まだかなあ」とジェスチャー付きで言う。（3：2）

・散歩に出ると、車庫をトンネルに見立てて、「しんかんせん、あぶなーい。」「まだかなー、きた、かつこいいね。」と言い、見に行ったことを再現する。（新幹線ごっこ）（3：2）

体験がごっこ遊びへと発展している。何かをある事物に見立てる活動において、言語の役割は重要である。

・母が「さくらえんに行くよ」と言うと、ちょっと考え込んでから、「けがしたよ。」「サーカスに行ったよ。」「どらえもん握手したよ。」と連休中の出来事を思い出して言った。（おともだちや先生にお話するつもりで）（3：6）

母の話聞き、園に行って友達や先生に話をする情景を思い浮かべている。経験したことを話したいという気持ちは、体験を共有していない他者にそのときの自分の気持ちを伝えようとするもので、本児の発話は他者を意識した社会的な会話となっている。

・「ポカリ、かう」と言うので、近所の自動販売機まで歩いて買いに行ったが、2件とも

売り切れだった。母が「ポカリ ないね。売り切れだって」と言うと、悲しそうに、「ポカリ、ないねえ。」と言った。3軒目にやっと見つかると、「ポカリ、あったね。ポカリ、買う。」と言った。自分でお金を入れてボタンを押し、それが出てくると、「ポカリ、ぴっ、でできた。」とうれしそうに言った。(3:7)

ポカリを買いに行きたい、と、ことばで要求を伝え、母と買いに行ったときの会話である。母子は体験を通して、事象やお互いの気持ちを伝え、理解している。母子にとってことばが気持ちの交流を支える重要な手段となっていることがわかる。

・SLがトンネルの中に入ると、「トンネルくらーいね。」と言い、トンネルからぬけると「あ、あかるくなった」とうれしそうに言った。(3:8)

・SLにのって津和野に行った帰り、「Rちゃん、今から汽車に乗っておうちに帰るよ。」と母が言うと、「おうちに帰るよー。じいちゃん、ただいま。ぼっぼ のったよ。」と言った。(3:8)

SLに乗ったときに体験したことを言語で表している。「うちに帰る」ときいて、祖父に体験したことを伝える時のせりふを言っている。体験で得た気持ちの高まりが、他者に伝達する意欲を高めるものとなっている。

・妹がテレビの真ん前に座っているので、「Yちゃん おめめ ちかいよー。」と言って、妹を抱いて後ろに連れていこうとした。(3:8)

・妹が食事のときに椅子からたちあがろうとすると、「Yちゃん、ちゃんとすわって。おばけくるよー」と、何度も何度も言い聞かせた。(3:9)

妹の行動を注意するという言語活動である。これは、かつて自分が母から受けた注意のことばである。母が自分に言ったとおりに、妹に対し言った。自分は母で、妹は自分であるとする、そのような役を演じる活動であると言える。

・母が「Rちゃん、今日ママが居なくても一人でバスに乗ってさくらえんに行ったね。すごいねー。あしたもバスに乗って行く？」ときくと、うんうんとうなづいてから、「Rちゃん、一人でバスに乗る、さくらえん行く。」と行った。(3:11)

ほんとうはひとりでバスに乗って行くのは不安なのだが、母の話が支えとなり、「ひとりでバスに乗る」と言って自分を励ましている(自己対話)。ことばが自分の気持ちを高める機能を持ってきた。

#### IV 考察

##### 1. コミュニケーションの初期発達の条件

前言語期で、本児は、視線や指さし、ジェスチャーなど、多様な手段を使用し、意図を表現した。そして、家族は子どもの意図を、視線や表情、指さしやジェスチャーなどから理解した。本児と家族の意思の疎通には、このような多様な手段の使用が重要であった。

難聴児のコミュニケーションの初期発達の条件は、子どもが自分の気持ちや考えを多様な手段を用いて表現するという能力を養うことである。さらに、親子はこのような手段を用いて意思の疎通がはかれるということを、十分に認識する必要がある。本児は補聴器を装着し、音やことばの存在を知り、やがて、音声を用いて意図を表すようになった。子どもと家族は相互に多様な手段を用いながら、意図を伝えよう、わかりあおうとした。このようなやりとりの積み重ねが親子のコミュニケーションの基盤を形成したと考えられる。従って、本児がことばの意味を理解し、初語を獲得した背景には、コミュニケーション基盤の形成が寄与したものであると考えられる。

中村も、コミュニケーションがことばの発達を支え、ことばの発達がコミュニケーションの発達を支えると述べている<sup>6)</sup>。一語発話期および二語発話期において、子どものことばは指さしやジェスチャーなどの他の手段に支えられ、その意味が明らかになる。つまり、初期のコミュニケーションの発達には、多様な手段を用いて親子の意思疎通をはかるということが重要であると考えられる。

## 2. 言語機能の獲得

子どもは自分の意図を最初は視線や指さし、ジェスチャーなどで表す。子どもはこのような手段を用いて伝達するという機能を学習する<sup>7)</sup>。

本児も前言語期において、意思を伝達するということを獲得した。また、補聴器を装着し、ことばの存在とその意味を理解した。

一語発話期では、一語に他の手段を併用することで多語文を構成した。その内容は要求、叙述、思考、応答などに分類された。とりわけ、思考や応答の機能は、伝達された内容から発展した、本児の自発的な活動である。

一方、二語発話期では、語の増大に伴い、「これは〇〇」と命名する活動が盛んになった。語彙の増大について、小山は、日常生活の広がりや他者認識の発達が関連すると報告している<sup>8)</sup>。本児も家族との生活体験を重ねることで、その時々的事象や気持ちをことばで表現する力を養った。その力が、語彙や文の長さの増大を促したものと考えられる。

また、多語文の時期には、発話の内容は眼前のことだけでなく、過去の経験や未来の行動を予測したものとなった。他者から伝達された内容をもとに、思考し、その事柄をまた、他者に伝達するという複雑な言語機能を形成した。日常生活の経験を再現化したり、他者にその経験を伝えようとする際には、言語の役割が本児にとって必須のものとなった。生活体験が豊かになり、関わる人が家族から不特定の多数の人へと広がったことは、本児のイメージの形成に貢献し、語彙や文の獲得を促したものと考えられる。また、語彙や文の発達が本児の思考の機能を活発にさせたものと考えられる。思考の深まりは他者への伝達意欲を高め、他者とのやりとりの機会を増すものとなる。本児にとって「言語」とは、伝達と思考の両者の発達を支えるものとなった。

## 3. ことばを主体的に獲得するための手がかり

本児のことばの獲得には、母親を中心とする家族の役割がきわめて大きい。家族は子どもが視線や指さし、ジェスチャーなどで表そうとする、その意図を確実に受け取り、言語化して子どもに返していく、という丁寧なやりとりを実践した。親子は日常生活の様々な場面でやりとりを積み重ね、気持ちの交流をはかった。そして、子どもは自分の気持ちを

支えてくれる人との間で伝達することの楽しさを味わった。この、他者に「伝えたい」という気持ちの高まりがことばを獲得したいという意欲を高めるものとなった。家族が意図的にことばを教え込まなくても、子どもは日常生活の様々な体験から得られたイメージを自ら形成し、それを表すことばを獲得した。本児が主体的にことばを獲得するには、日常生活の様々な体験活動をもとに家族がやりとりを深め、気持ちの交流をはかることにあると考えられる。やまだも、ことばがうまれるには自分の見たもの、体験したものを、他者に伝えたい、わかちあいたいという強力な欲求と、それを支える人間関係が必要であると述べている<sup>9)</sup>。さらに大森は、難聴児が母親とことばによるやりとりを深めるためには、体験を豊かに共有し、その意味(や概念)を表す記号(身振りや表情など)を用いて意味を共有する。それがやがてことばによるやりとりに移行していくと述べている<sup>10)</sup>。

乳幼児期における親子の相互作用は、子どもの言語獲得へと通じるコミュニケーション行動の形成に強力な機会を作る<sup>9)</sup>。

従って、難聴児の療育は、日常生活の親子の体験活動を中心に、家族内の安定したコミュニケーションを形成することを目的とするものと考えられる。

#### 4. 難聴児とその家族への援助のあり方

従来の難聴児の指導では、療育に携わる専門家が家族を指導するというものが主流であった。しかし、専門家は療育のパートナーとして、家族と共に子どもの生活や遊びを育てる立場にあると我々は考えている。子どもの成長や発達についての情報を交換し、子どもが今、何を望んでいるかを共に考えることで、相互の信頼関係が築かれ、良好な療育が行えるようになるのである。

本児に難聴が発見されたとき、家族は子どもの将来と養育に不安を抱えた。難聴とは何か、補聴器はなぜ必要なのか、子どもにどのように関わればよいのかといった重要な事項を家族が共通に認識し、家庭で安定した養育が行えることが重要である。養育の中心は母親であったが、家族の理解と協力がなければ安定した養育は行われない。そこで、我々は、本児とその家族を支援するために、次の点について留意した。

①難聴と診断され、将来に不安を抱えた家族に対し、難聴についての知識と理解を深めるための説明を入念に行う。

②家族が障害を受容していく過程を支える。

③子どもへの接し方をあそびの場面で具体的に提示する。

④子どもの行動変容の過程を話し合い、子どもの成長、発達についてお互いに認識する。

本児の療育は母が核となり、家族全員により行われている。療育場面には祖父が付き添い、母を支えることが多かった。また、父は家庭での本児の療育に積極的に取り組んでいる。一方、祖母は家族全員が本児の療育に取り組めるよう、支援をしている。本児の療育が安定して行われるのには、家族全員の力によるところが大きい。

柚木は家族支援について、障害のある子どもの家族は、その子どもを含めた家族のひとりひとりが充実した生活をおくることができるような支援を必要としていると述べている<sup>11)</sup>。療育に関わるものは、子どもと家族の要望に応え、家族の各々が地域で充実した生活を送ることができるよう、地域支援のネットワークを作る責務がある。本児は幼稚園入園前に母子通園を行い、地域の子どもたちと関わる経験を積んだ。今後は地域支援を充実するために、育児にかかわる様々な人々との連携をはかり、子どもとその家族に対する詳

細な支援を行う必要がある。

#### 引用文献

- 1) 田中美郷 2001 耳鼻咽喉科プラクティス3. 新生児・幼児・小児の難聴 池田勝久, 加賀君孝, 岸本誠司, 久保 武編 文光堂 p.12 小児の難聴の診断・治療・教育方法の歴史の変遷と現状, 今後の展望
- 2) 大沼直紀 2001 耳鼻咽喉科プラクティス3. 新生児・幼児・小児の難聴 池田勝久, 加賀君孝, 岸本誠司, 久保 武編 文光堂 p.116-119 0歳-乳児の聴覚補償の方法と成果
- 3) 鈴木情一 1987 子どもの言語心理2 幼児のことば 大日本図書 福沢周亮編 p.172 幼児の文法能力
- 4) 大久保愛 1981 子育ての言語学 三省堂選書 p.152
- 5) 村田孝次 1982 子どものことばと教育 金子書房 p.93
- 6) 中村公枝 1993 JOHNS 9 p.269-275
- 7) D.K.バーンスタイン, E.ティーガーマン(編) 池 弘子, 山根律子, 緒方明子 訳 1994 子どもの言語とコミュニケーション -発達と評価- p.87
- 8) 小山 正 2000 ことばが育つ条件 培風館 p.6
- 9) やまだようこ 1987 ことばの前のことば 新曜社 p.235
- 10) 大森千代美, 野中信之, 中川 弘, 川野通夫, 中島 誠 1995 音声言語医学36 p.262-263 一重度難聴児の言語発達

#### 参考文献

- 11) 田中美郷, 進藤美津子, 小林はるよ, 他 1978 Audiology Japan 21 p.52-71 乳児の聴覚発達検査とその臨床および難聴児早期スクリーニングへの応用
- 12) 廣田栄子 1986 JOHNS 2 p.1533-1538
- 13) 大久保愛 1981 子育ての言語学 三省堂選書 p.146-148
- 14) 柚木 馥 2000 教育臨床の基礎 コレール社 p.9-20